

嘘の発生とその展開

渋谷園枝, 渋谷昌三

本論文は、渋谷らの報告¹⁾に関連し、嘘の発生とその展開について論及した。子どもはいつから嘘をつくようになるのか、なぜ嘘をつくのか、その嘘にはどのような意味があるのか。これらの問題について、青少年および大人の嘘も含めて考察した。

子どもはかなり早い時期から嘘をつくようになると予測される。子どもは親に対して秘密を持ったり、嘘をついたりすることで、親の束縛から解放されると言える。子どもの嘘は自己の確立や社会化と密接な関係があると考えられる。

親は子どもに初めて嘘をつかれたとき、当惑したり、怒りを感じたりする。しかし、子どもは嘘という形をとって、様々な心理的な問題を訴えることがある。私たちは子どもの嘘の善悪をよくみきわめて、できるだけ寛大に対処する必要があるだろう。

キーワード：嘘、子ども、思春期

はじめに

本論文は、渋谷らの報告¹⁾に関連した問題として、嘘の発生とその展開について論及した。子どもはいつから嘘をつくようになるのか、なぜ嘘をつくのか、その嘘にはどのような意味があるのか。これらの諸点について、青少年および大人の嘘も含めて、従来の文献を分析するという方法で考察した。

嘘の発生と展開に関する論及

1. 嘘の概念

(1) 心理学からみた嘘の定義

Stern²⁾は「嘘とは、だますことによってある目的を達成しようとする意識的な虚偽の発言（口述）である」と定義している。そして、嘘と言うためには、次のような特徴が認められなくてはならないとしている。

①虚偽の意識がある。したがって、自分の言っていることが事実と違っていることを承知している。

②だます意図がある。間違っていることを相手に信じさせようとする意図がある。また、故意に、計画的に、本当のように装って言いくるめようとする。

③だます目的がはっきりしている。罪や罰を逃れたり、自己防衛しようとしたりする目的がある。この目的は利己的な動機から出ているのだが、ときには利他的（他人の利益のために自分を犠牲にすること）な動機がみられることがある。

したがって、記憶違い、思い違い、勘違い、言い間違いなどは、虚偽の意識とだます意図がはっきりしないので、嘘の定義にはあてはまらないことになる。

ところで、Peterson³⁾は、嘘を「嘘の意図」と「嘘の結果」という2つの独立した側面から分類している。意図と結果は、それぞれ次のような3次元に分けられ、嘘の認識や道徳的判断は総計6次元で説明されている。

第1は、嘘の意図に関する3次元。

①故意性（熟慮性）。だます意図があるかどうかの次元。

②動機。意図の内容が利己的か利他的かの次元。

③結果の意図性。結果が予見されているかどうかの次元。

第2は、嘘の結果に関する3次元。

①真実性。真実とかけ離れている程度の次元。

②信用性。相手がそれを信じるかどうかの次元。

③実質的結果。相手がそれによって受けた被害や利益の次元。

(2) 嘘つきの病

病的虚言症の人は、自分の言っていることが事実と反しているにもかかわらず、本人は事実であるかのように思い込んでいる。空想と現実を混同していたり、過去の話と未来の話がごちゃまぜになっていたりする。何の得にもならないのに、次から次へと嘘をつく。これが通常人の嘘と違う点である。

病的虚言症は、ヒステリーや意志薄弱性の非行者にもみられる（相場⁴⁾）という。例えば、嘘に関連したヒステリーの人の特徴として次の事柄があげられる。

①情熱家であるように見えるが、実際には、冷たい人間で、人前では情熱家であるかのようにとりつくろう。

②病気になった方が得をすると判断すると病気への逃避現象（仮病や嘘でなく、本当に具合が悪くなる）がみられる。天候のせいで体の調子が悪いとか、偏頭痛やめまい、不眠、食欲不振、疲労感などを訴える。極端なときには気絶する。

③心気症の傾向があり、薬を飲んだり、注射を打ってもらうのが好きである。

ヒステリーの人の自己顕示欲求は喝采願望という形で現される。自分の話に相手が身を乗り出すようにして興味を示してくれたり、感動してくれたり、あるいは尊敬のまなざしを向けてくれたりすると、この上ない喜びを感じる。これが喝采願望である。喝采願望を満たすためには、嘘であっても、とにかく相手をとりこにするようなおもしろい話でなければならない。ここに病的な嘘が生まれる。

その一つに作話現象がある。例えば、ロールシャッハ・テストの図版を見せたとき、図版の内容とは無関係に物語を作り上げる人がある。作話している本人は嘘をついているつもりではないのだが、他人には「でたらめの話」ということになる。

コルサコフ症候群（記銘力障害、健忘、失見当、作話などを主症状とする）や精神分裂病（自分だけにわかる言葉や文字をつくる造語症、無関係な言葉を並べる言葉のサラダ、独語、妄想などの症状がある）の患者の中には、この作話現象が見られることがある。

作話症のもっとも有名な人物は、18世紀ドイツのミュンヒハウゼン男爵だといわれている。彼はトルコ戦役にも参加した実在の領主なのだが、物語『ほら男爵の冒険』の主人公として広く知られている。

「湖に鴨猟に行ったとき、弾薬がなくなったので、ロープの端にベーコンを結びつけて投げた。一羽の鴨がそれを飲みこんだのだが、ベーコンがつるつるすべるので、すぐに尻から出てしまった。それを次々とたくさん鴨が飲み込んでいき、何十羽もつながって空に舞い上がったので、そのまま家に帰ってきた・・・」

こんな支離滅裂な嘘を聞いて怒り出す人は少ないだろう。嘘話をしている当人が喝采願望や空想癖を満足させようとしているだけなので、他人には、それがホラであることがすぐわかるからである。。

ところで、逃避現象にも嘘（ただし、本人は嘘をついているつもりはないのだが、他人には嘘と思える）がみられる。例えば、「午前八時の頭痛」などと呼ばれる病気への逃避がある。学校に行くのがいやな子どもが、登校時刻になると頭痛などの体の不調を訴えるというものである。「頭が痛い」とか、「おなかの具合が悪い」ので「今日は学校に行けない」という訴えである。

適応困難な状況に追い込まれると、その状況への適応行動に欠くことのできない身体の機能に異常があらわれる。例えば、手がふるえて字が書けないとか、目がかすんで字が読めない、あるいは、体の具合が悪くて登校できないといった症状である。これらは仮病と違って、本人が意識しないままに生じると考えられている。

その他、詐欺師の嘘があるが、ここでは言及しないことにした。

2. 嘘の形成

(1) 嘘の発生

次のような事例がある。1歳11カ月のある男の子は、寝た振りをして、呼びかけにはいびきで答えるという高度の技を使う。また別の1歳7カ月の男の子は、読み慣

れた絵本の中の絵探しに、「ちょっとわからないフリ」という演技力を発揮したりする。ただし、先に紹介した嘘の定義に照らし合わせると、これらを嘘に含めてよいかどうかには異論が生じるだろう。

「子どもは純粋である」という考え方の中には、「そうであって欲しい」という大人の願望が含まれている。心理学者の Ekman⁵⁾によると、子どもの嘘の種類は大人顔負けだという。罪のない嘘もあれば悪質な嘘もある。相手を傷つけないためにつく嘘もあれば、逆に、相手を陥れようとする嘘もある。さらに、罰を受けるのを避けようとする嘘、見栄を張るための嘘などもある。

こうした嘘は、発達とともに少しずつ体得していくのであり、嘘をつくという面からも、大人社会の仲間入りをしていくのだといえる。

(2) 嘘と作り話

児童精神科医の Coles⁶⁾は、「作り話は空想の産物」とあるとする。嘘は、「意図的に相手をだまそうとする行為」であるが、空想は、「ある意味で、本人が真実と信じるものに近づこうとする行為」だとしている。

例えば、「森の小人に会った」と子どもが話した場合、それは嘘ではなく、単に空想の話をしているに過ぎないことになる。Coles の考えでは、「その子は自分の空想と現実の境目を確かめようとしているのかもしれない」。だから、悪意で発する嘘とは異なるというわけである。小さな子どもほど、現実のできごとと空想の産物との区別がつきにくい。

「嘘をつくのは悪いこと」「嘘をついてはいけない」と教えられた子どもは、「嘘は悪いものであるらしい」ことは理解する。例えば、ある6歳児の場合。母親が、勘違いをして、火曜日に学校でパーティーがあると言ってしまった。実際には別の曜日で、これは事実と反する発言だった。こうした勘違いはよくあることで、事実と反するからといって嘘をついたとは言えない。しかし、この子は、その母親を「嘘つき」と呼んだ。

つまり、この子は、まだ嘘というのはいったいどんなことを指すのかが、正しく理解していないことになる。先述の Ekman⁵⁾は、8歳未満の子には、こうした違いはまだ理解できないとしている。

(3) 嘘と知的発達

生まれたばかりの子どもにとって、世界は混沌とした状態のものであり、意識の中で自他の区別はない。そうした発達初期を過ぎると、子どもは、母親が自分とは別の存在であることに気づき始める。これは、個人差はあるが、およそ6ヶ月から2歳くらいの間と考えられている。

Waron⁷⁾は、鏡像の了解（例えば、鏡を見て自分の鼻についている口紅を触ろうとしたり、鏡の前であれこれ動作をして鏡像と実像を見比べたりする）ができるのは12～15ヶ月であることを実験的に確認している。鏡像の了解という面からすると、この年齢のときに自己認知（自己意識的行動）がなされていると考えられる。つまり、この年齢になると自他の区別がかなりはっきりしてくると言える。

東山⁸⁾は「自分以外の存在がわかり、そうした存在の言っていることがわかる時期になると、子どもは嘘をつき始めるらしい」と述べている。「子どもは純粋である」というが、実際には、「純粋なのではなく、嘘をつけるほど、知的に発達していないだけ」なのである。

例えば、10か月の子でも、まわりの人に気に入らないことをされた場合、聞こえない振りをすることがある。イヤイヤをするという単純な拒否や、泣きわめくとか逃げ出すという手段では、効果がうすいか、あるいは労力がかかり過ぎたりする。そこで、手っ取り早く、しかも効果の高い「聞こえぬフリ」をするのであろうと考えられる。

言葉や行動がもう少し自由になると、聞こえないフリに加え、その場から姿を消すとか、話を変える、別のことを始めるといった高度なスキルが身についてくる。そして、言葉が自由自在に使いこなせる段階になると、立派な嘘をつけるようになるというわけである。

以上のように、子どもが上手に嘘をつけるようになるということは、その子が順調に知的発達を遂げている証拠と言える。

(4) 嘘の学習

「嘘をついてはいけない」と教えられるにもかかわらず、子どもはいつの間にか嘘のつき方を身につけていく。嘘をつくという行為は、実際には、「嘘はいけない」と説く大人がモデルになって学習されると考えられる。例えば、欲しいものの前に座り込んで動こうとしない幼児に向かって、親は「置いていきますよ」というが、本当に親が子を置いていくはずがない。また、親は子どもとした約束を忘れることがある。こうしたことが重なると、子どもは「親のいうことは実際には実行されない（つまり嘘）」ことを学習するのである。

これらは間接的な学習であるが、直接的な学習もなされる。例えば、「家庭教師に来てもらっているなんて、誰にもいっちゃダメよ」「お父さんには（あるいは、お母さんには）内緒にしてね」「（かかってきた電話に、あるいは訪ねてきた人に）お父さん（お母さん）はいないっていいなさい」などと、子どもに嘘の手本を見せる。

「子どもに、本当に、嘘をつく人間になってほしくないのであれば、両親が手本を示せ」と、先述の Ekman⁹⁾は述べている。彼によると、親は、「方便」としての嘘もつかないこと、家族の信頼のきずなを強調すること、やさしさを示すことが大事だという。さらに、「悪いことや、それを隠すための嘘は罰してやればいい。しかし、許してやることも忘れずに」という態度で子どもの嘘とつき合うべきだと述べている。

(5) 『嘘も方便』がわかる時期

「嘘はいけない」といわれて育ち、自分の子にも同じように言い聞かせている大人が、実生活で、『嘘も方便』を公言することがある。

Ekman⁹⁾は、11歳頃には、ほぼ4分の3にあたる子が、『嘘も方便』といった態度を会得しているという。5歳児の段階では、「どんな場合にも嘘はいけない」と考えているのは95%だった。ところが、11歳では、28%の子

が「絶対に嘘はつかない」と答えたに過ぎない。5歳児でも5%の子に『嘘の方便』が理解できるきざしが見えるといえる。子どもたちは予想外に早い時期から嘘の処世術を身につけていることがわかる。

Parke & Sawin⁹⁾は子どものプライバシーの研究を行っている。そのなかで、親が子どもの部屋に入るとき、子どもが10歳前後になると親に対してノックを要求するようになることがわかった。子どもが嘘を方便として使うようになる年齢というのは、プライバシーの意識を持ち始める時期でもあることがわかる。

ところで、「その場限り」ということがある。東山¹⁰⁾は「その場限りとは、ことばを変えると社交辞令であり、嘘・外交辞令・ユーモアは親戚の領域である」と述べている。親の発言と行動が違う場合、子どもから見ると明らかに嘘をついていることになる。しかし、親自身の意識の中では、「その場限り」においては本当のことなので、自分は嘘をついたつもりはない、ということになる。

「嘘はいけない」というのは万国共通である。契約社会においては嘘に代わってユーモアが発達し、日本においては「嘘ではない」外交辞令が盛んになったと考えられる。子どもは身近な大人をモデルにして発達するのであるから、日本の子どもが『嘘も方便』や「外交辞令としての嘘」を早い時期から修得するのは当然の結果といえよう。

3. 子どもの嘘の変遷

(1) 適度の秘密の必要性

アメリカで、1980年代の終わりに行われた調査¹¹⁾では、情緒面で問題のある子は健康な子のほぼ3倍も嘘をつくとの結果がでた。また、イギリスで、1970年代の初めに行われた調査¹²⁾では、虚言癖のあった子の3分の1は後に窃盗犯になっているとの結果であった。これらは『嘘つきは泥棒の始まり』の格言を支持するような報告である。

東山⁸⁾の分析によると、まわりの大人に対して嘘や隠し事が多い子どもには、次に示す2つのパターンが認められる。第1は、親の構いすぎで、自立を妨げられるために嘘をつかざるをえない子どもである。第2は、親や大人からの保護が少ないために自分が処理できないことまで背負い込み、身動きが取れなくなつたために、嘘をつき続けなければならない子どもである。

ところで、人には誰しもひとつや二つは秘密がある。秘密があるためにその人が魅力的に見える場合もあるかもしれないが、その秘密があまりに重荷になった場合には、それは深刻な問題となる。東山によれば、子どもは「適度の秘密」を持つことがある。「適度」というのは、かなりの苦労はあっても、子ども自身で解決できる範囲内のものである。たとえまわりの大人に相談したとしても、結局、自分で解決しなければならない類のものであり、当面は秘密にしておいたほうが、乗り越えやすいという内容である場合が多い。

嘘の多い子の前者のタイプは、適度の秘密を持つことすら許さない親が、子どもに干渉し過ぎるために、子ど

もは自分を守ろうとして嘘をつくというパターンをとる。それに対し、後者のタイプは、干渉どころか放っておかれたり、まわりにいる大人たちが信頼するに足らない人たちであったりする場合に生じる。だれも相談相手になってくれないため、自分の処理能力以上の秘密を抱え込んでしまい、嘘をつかざるを得ない状況に追い込まれてしまう。

こうしてみると、子どもに嘘をつかせているのは、「嘘はいけない」と言い聞かせている当の大人たちであることがわかる。言動が一致しない大人に囲まれていると、子どもは不安になり情緒面も安定しなくなり、大人を信用できなくなる。

冒頭の調査で指摘された情緒面で問題のある子どもや虚言癖のある子どもの言動は、子どもたちを取り巻く大人たちによって作られたということになる。このように考えると、こうした子どもたちは、嘘をつくことで、大人に何らかの助けを求めているのだといえる。

(2) 虚栄心

嘘つきの子どもは人一倍虚栄心が強いとの報告¹¹⁾がある。たとえば、嘘つきの子どものグループ全員が「わたしは美男子と結婚したい」という願望を書いていた。ところが、嘘をつかない子どものグループでは、この願望を書いた子どもはいなかった。また、「あなたは自分をどう思うか」という質問に対して、「わたしはたいへんに美しい」という回答をしたのは、嘘つきグループでは66.7%、嘘をつかないグループでは誰もいなかった。

相場⁴⁾は、嘘つきの子の回答傾向から、これらは「喝采願望の現れ」であると分析している。喝采願望は、スターやヒーロー、親分になって、人々の喝采を浴びたいというもので、これ自体は悪いものではない。むしろ、子どもならば、多少の差はあれ、誰もが持っているものと考えられる。

この願望がプラスの方向に働けば、子どもの向上心を刺激して、願望の実現に向けて努力を惜しまないという動機づけになる。しかし、望みはしても、それを実現させようと努力することもせず、単に思っているだけにとどまっている限り、実現の可能性は非常に低い。

この実験で、喝采願望を強く示した嘘つきグループの子どもたちは、嘘をつくことで、友だちやまわりの大人の関心を引きたがっているのだと思われる。喝采願望はあっても、現実には喝采を浴びる段階に至るのは容易ではない。手っ取り早く喝采を浴びるために、相手の気を引く嘘や相手がうらやましがるような嘘をつくことになる。例えば「家族皆で外国に行った」「(皆が欲しがっている)ファミコンのソフトを買ってもらった」というような嘘である。

こうした子どもたちは、嘘をついて相手の気を引くことができて、それはその時限りのものでしかないのに、結局そうした嘘を重ねることになる。そういう嘘をついてはいけない、とその子どもを責めることはたやすいが、その子が、なぜ嘘をついてまで他者の気を引こうとするのかということに注目する必要がある。ときには、喝采願望によるものではなく、大人の援助を求めるSOSか

もしれないからである。

(3) 自己中心性

自己中心的な性格の子ほど嘘をつくのが上手であるとの調査結果がある。しかも、この性格の子は、大人に取り入るのもうまいため、大人にとって、こうした子の嘘はよりもっともらしく聞こえるらしい。

自己中心的な人は、客観的現実と主観的現実の区別がつかない、視点を変えて考えるということができない、他人の立場にたって考えることができないという特徴がある。自己中心的な子が嘘がうまい、というのも、自分で言っている嘘が、実は嘘かどうか、自分でもわからなくなっているからとも考えられる。つまり、自分でその嘘を信じているのだから、当然、まわりの人も信じ込んでしまうというわけだ。

ところで、Piaget¹²⁾は、9歳前後から自己中心性の思考様式が次第に消滅し、他者の立場や視点から物事が理解できるようになるとしている。7歳前後では両親の道徳的判断(たとえば善悪の判断)が絶対的な意味を持っていると考えており、規則や道徳は絶対的で動かないものという道徳観(道徳的実念論)を持っている。9歳前後になると、道徳や規則は人が作ったものであり、時と場合によって変えられるものであるとの理解が可能になる。道徳的実念論から道徳の相対性へと移行するというわけである。つまり、9歳前後というのは、自己中心性から脱却し、道徳的な考え方が変化する時期だといえる。

こうしたことから、自己中心的な人の思考様式、殊に、嘘に関しては、発達初期で留まり、進展がないことになる。発達初期に獲得したこの種の嘘から抜け出せなくなってしまうとも考えられる。

4. 自己防衛

フランスの童謡『クラリネットをこわしちゃった』の一節に、「パパからもらったクラリネット／・・・／とっても大事にしていたのに／こわれて出ない音がある／どうしよう・・・」という一節がある。これは、クラリネットをこわしてしまい、見つかったら怒られるに決まっているので、どうしたらよいかわからないという子どもの気持ちを現している。

こんなとき、自分がこわしてしまったにもかかわらず、「ボクがこわしたんじゃないよ」とか、「ボクが吹こうと思っただけもうこわれてた」などと弁解しながら嘘をついてしまう子がいる。親に壁の落書きが見つかったとき、「ボクじゃないよ」と言いながら、自分より小さな赤ちゃんや犬を指さしたりする。

これらは、いずれも、自分が叱られるのを避けようとしてつく嘘である。こういう嘘に出会うと、大人は、「お前は何でもすぐ人のせいにする」とか、「自分でやったんでしょ。嘘をつくんじゃないの」というように叱責することが多い。子どもが嘘をついてまで自分を守ろうとするのはなぜかを考えてみる必要がある。以前に同じようなことがあったとき、かなり厳しく叱られたという経験があるときには、同じ辛い目にあうのは避けたいと考える。そのために、嘘をつかざるを得ないのかもしれない

いからである。

Ekman⁵⁾は、嘘に対する厳罰は、「正直の論理よりも、むしろ罰への恐怖心を植えつける結果になる」と述べている。つまり、嘘を厳しく罰し過ぎると、嘘はいけないということを習得するどころか、次の機会には罰を逃れようと、又嘘をつくという悪循環が始まる可能性が高くなるといえる。

5. 精神的な不安定さ

学校のクラスの中で嘘をつく子の中には、どこか不安そうで、自信のなさそうな子がいる。こうした子の背景を探ると、親に対する愛情欲求が満たされていなかったり、きょうだいに強い嫉妬心を持っていたり、家族の間に葛藤があったりすることがある。

ときには、大人たちから、実際の年齢以上に大人であることを求められている子もいる。このような子は外見上は大人のような言動をとっても、精神的にはまだそこまで育っていないことが多い。

自分の置かれている立場が不安定である子どもは、精神的にも不安定になりやすい。そうした不安定な気持ちを嘘をつくことで晴らそうとする子がいる。また、愛情欲求が高まるあまり、夢みて嘘をつく子もいれば、他の人の注目を自分に集めようと嘘をつく子もいる。

いずれの場合も、嘘をつくことによって、精神的に不安定な状態をバランスのとれた状態にしようとしているのだと考えられる。

6. 思春期の嘘

(1) 不平等の告発

思春期は、「もう子どもではないが、さりとて大人でもない」という精神的にも身体的にも微妙な時期である。実際には、大人の世界に背伸びしてでも加わりたいと願っており、気持ちの上では同格のつもりでいる。

ところが、大人は「おまえには関係ない」「おまえには早過ぎる」などと別扱いにする。そこで、子どもは秘密を持つことで大人と対等になろうとする。つまり、秘密を持つこと、すなわち大人が干渉できない世界を構築することで、大人と対等になろうとするのである。

子どもたちは、こうした経過から秘密を持ち、それを守るために嘘をつく。この場合、嘘をつくことによって、現実の世界では口にできない「大人には関係ない」というセリフを間接的に表現し、大人が強要する不平等さを告発しようとしているのだと考えられる。大人と同じ自立した存在であろうとする欲求が嘘をつかせるのだともいえる。

(2) プライバシーの確保

大人になっていくということは、同時に、少しずつ親に秘密ができていくということでもある。子どもは着々と自分の世界を築いていく。小さなころは、何でも親に話した子どもでも、この年代になると、その年齢に相応しい秘密を持つようになる。

Hoit¹¹⁾は「初めて嘘をうまくついたとき、子どもは絶対的だった親の束縛から自由になれる」と述べている。

嘘をつくことで親と自分との間に適切な心理的距離をおくことができるわけである。このことが子どもの自立や精神的な離乳と関係していると思われる。

親と子は別々の人格を持つ存在なのだから、それぞれの世界があり、それぞれに秘密を持つのは当然であるが、このことを認めようとしない親がいる。例えば、子離れできない親は、子どもの方は自立にむけて秘密を持ちつつあるのに、何でも話してくれた小さな子どものころのままにとどめたいと考え、子どもの「秘密の花園」に土足で踏み込もうとする。

これに対抗して、子どもは、秘密を守ろうとして、嘘をいったり、ごまかしをいったりする。反抗もする。これは、もちろん、自立に必要なことからである。換言すると、これらは、プライバシーを守るための嘘、自立のための嘘ということになる。しかし、なかには、親の力の方が強く、こうした嘘をつけない子もいる。「子どものことは隅から隅まで知っていないと気が済まない」という親の子は、秘密が持てない、自分の世界が築けない、だから自立できないということになる。

このように、子どもの嘘の中には自立のために必要な嘘がある。そうした嘘を見分けて、大目に見るという大人の態度が必要とされる。

(3) 三味線をひく

最近では、さらに低年齢化していると推測されるが、中学や高校の定期試験の時、試験が間近になると、勉強のことが話題になる。こんな会話が交わされる。「そろそろ勉強を始めた?」「始めるわけないよ。一夜漬け、一夜漬け」「(「浅漬け(=朝漬け)」というのもあるらしい)「俺もさ」。

実際には、二人ともすでに勉強を始めている場合もあれば、一方はすでに始めているのだが、してない風を装って、まだ始めていないらしい相手に調子を合わせていることもある。勉強していることを表に出さない方がスマートという感覚が働くのかもしれないし、ガリ勉タイプは嫌われるという配慮が働くのかもしれない。これらの会話には嘘が内在していることになる。

『三味線をひく』(適当に調子をあわせてごまかす)というが、「あいつは、あんなこといってるけど、三味線ひいてやがるんだぜ」といった具合に、友だちの嘘が仲間の話題になることがある。これらは、「互いにあまりに泥臭いところは見せたくない」という思春期のプライドや、受験戦争においては皆がライバルで「本音は見せられない」という意識がつかせる嘘と考えられる。

(4) 正義感からの嘘

グループで万引きをしていたのが発覚した場合、親や先生の追求にもかかわらず、一緒に行動した友だちの名を明かさない場合がある。これは、子どもなりの正義感や倫理観から出る嘘である。

この場合、ただ単に友人をかばっているだけならば、非常に単純な嘘であるといえる。難しいのは、仲間からの報復やいじめを恐れて本当のことが言えないでいる場合の嘘である。年齢が上がるにつれ、子どもの嘘のつき方も巧妙になるため、こうした嘘が、はたしてどのよう

な理由によってつかれているのかを見極めるのが難しくなる。

7. その他の嘘

(1) 優しさの定義

精神医学者の大平¹³⁾は、最近の若者と今の大人の「やさしさ」に関する定義は天と地ほど違っていると分析している。

たとえば、親からこづかいをもらうのは、「親に、親をしているという実感を味あわせてあげるためのやさしさ」と語る女子高生の例がある。また、電車の中で、年をとった人に席をゆずらず眠ったふりをするのは「その人を年寄り扱いしないというやさしさのため」という女性がいる。

現代の若者たちは、こうした身勝手なやさしさの定義を持つことで、また「ふりをする」、つまり一種の嘘をつくことで相手との関係から生じる摩擦から身を守ろうとしている。席をゆずらないという「やさしい」若者は、以前に席をゆずるやさしさを実行したとき「それを見事に裏切られた」という辛さを味わった体験があるのかもしれない。この場合には、「二度とそういう嫌な目にいたくない」という気持ちで、直接のふれあいを避ける「やさしさ」を身につけてしまったと好意的に解釈することもできる。

しかし、他人とのふれあいを回避するためのやさしさでは、他人と痛みを分かち合うことはできない。相手にやさしくしているつもりでも、結局、「自分を守るためのやさしさ」という嘘をついているということに気づく必要があろう。

作家の井上ひさし氏との24年間の結婚生活にピリオドをうって離婚した西館好子さんは、「嘘つきの人のほうが他人の痛みにやさしい」と、ある雑誌¹⁴⁾で語っている。西館さんの主張は「自分の欲望に正直になろうとすればするほど嘘つきになる。そして、嘘をつくという自分の弱さを知っている人は、嘘をつく他人にもやさしくなれる。逆に、自分は正しいと思い込んでいる人は、他人の弱さにやさしくなれない」というものである。

実際、同じ痛みを体験したことのある作家の瀬戸内寂聴さんや戸川昌子さんなどが、当時、西館さんの行く末を本気になって心配してくれたという。西館さんの言葉は、換言すると、他人の痛みが自分の痛みとしてわかるほど、また、生身の人間関係の中で辛い嘘をついてきた人ほど、本来の意味で、他人の痛みにやさしくなれるということになる。

(2) 役割期待関係から生まれる嘘

浜田¹⁵⁾は、「だますーだまされる」という関係が成り立たない嘘があると述べている。また、嘘は同時に、「あばくーあばかれる」という性格ももつが、これもまた成り立たない事例があるという。例えば、「えん罪事件」として再審で無罪をいわたされた人たちの、苦難の道の始まりともなった「虚偽の自白」がある。浜田の分析の要旨は次のようなものである。

本当の犯人が自分のした犯行を否認するのであれば、

それは明らかに嘘をついていることになる。取調官はだまされないように、この嘘をあばこうとする姿勢で臨む。取り調べというのは、基本的にその人は犯人であるという前提のもとに行なわれる。真実追求の場というともっともらしいが、つまりは、その前提を肯定させるための場である。

無実の人間が、どんなに自分は無実だと叫んだところで、それを証明するためには確たる証拠がなければならない。しかし、その「確たる証拠」というのが曲者で、これがなかなか立証できない。無実の人は、どんなに弁明しても聞き入れられないことに耐えられなくなり、「自白」してしまう。これが、「第一の嘘」となる。つまり、していないことを「した」といってしまう。

この自白が本当かどうかは、この時点ではもう問われない。というのは、前提が肯定されたにすぎないから、あとは前進あるのみとなるからである。凶器は、死体は、と次々に取り調べが進む。すべて、第一の嘘が大前提となるから、このあとは何についても「知らない」という言葉は通用しなくなる。供述は証拠と合う方向に導かれていくのみである。嘘が嘘を呼ぶのではなく、共同して嘘で嘘を紡いでいくのが、この「嘘の自白」の特徴である。こうした嘘は、取り調べという特異な場に特有のものであると考えられているが、浜田は「権力を背景に持つ一種の役割期待関係」という観点から、こうした嘘の一般性を強調している。

社会生活の中で、私たちは、夫婦、親子、教師-生徒、上司-部下などの役割関係を負わされている。そうした役割が期待させる嘘を私たちは共同して紡ぎ出している可能性がある。例えば、最近、セックスレス・カップルが話題になっている。ここでは、夫が義務や役割としてセックスを求め、妻が夫の期待に応えるような形で快楽の演技をしているという。この逆のケースもあるだろう。ここにも深刻な嘘がうかがえる。

以上のような例は、それぞれの役割に期待された力によって、知らず知らずのうちに、あるいはいやおうなく嘘をつかされている場合もあることを示唆している。

まとめ～臨床事例から

筆者たちが扱った臨床事例に基づき、子どもの嘘の意味を検討したい。ここで紹介する事例は、プライバシー保護のため、類似点の多い複数のケースを組み合わせたものである。

高校2年生のA子は中学生の頃から学校に行きしぶりがちだったが、高校2年の夏休み終了後、まったく登校しなくなった。高校の成績は特定の数科目が赤点すれすれである。小学生の時は成績優秀で、スポーツの代表選手に選ばれるなど、両親の期待は高かった。

母親は次のように訴えた。A子の生活は、最近、夜昼が逆転しがちで、自分の部屋で夜遅くまで何かしている。CDなどを聴いているらしい。休み中にアルバイトをしたが、はたしてうまくいったのかどうかかわからない。親子間の会話は普通にあり、親子関係も夫婦仲も

悪くない。それなのになぜウチの子が登校拒否になるのかわからない。

面接を進めるうちに、母親が考えている「普通の会話」とは、実は、母親が知りたいことを子どもから聞き出すという情報収集的な性格のものであることがわかった。また、自室内やアルバイト先での様子も、本当は母親自身が直接のぞいてみたいのだが、のぞいたとき自分の予想と違うことが怖いと感じているためにすべて推測に終始することになる。「私（母親）がいなくても一通りのことが出来る子どもの姿を見る」怖さ故に、のぞくにのぞけないのである。

この母親は、子どものことはどんな些細な事でも知っておきたい、自分の支配下におきたいと思っている。幼児期や少年期と同様に、子どもは何でも母親に話すべきであるし、親の言うなりになるべきだと考えている。小学校まで子どもが優秀だったのは、自分が全て面倒を見てやっていたからだと信じている節がある。

思春期の子どもの側からすると、依存の対象が、親や先生であった時代から友人や先輩へと移っていく時期であり、また、親からの自立を目指す時期でもある。言い換えると、親の知らない世界を求め、そうした世界をつくらうとする時期である。その世界を守るため、子どもは親に知られたくない秘密を抱えることになる。しかし、母親は子どもが秘密を持つ事が許せないの、「秘密を明かせ」と子どもを追求する。子どもはこうした母親の追求の手を逃れるための方法の一つとして嘘をつく。これは子どもが自分の身を守る方便としてつく嘘といえる。

大人は子どもが秘密の世界を持つことを認めて、子どもが嘘をつかざるをいない状況まで追い込まないようにすべきである。というのは、子どもは秘密の世界を持っていないと、自発性を失ったり、物理的・精神的に「引きこもる」という形で自分を守る手段に訴えたりすることになるからである。

以上の事からすると、子どもの嘘のなかには「子どもの自立を妨げる大人がつかせている嘘」があることになる。発達や自立という面から見ると、人間関係の潤滑油としての『嘘も方便』とは別に、発達の段階で、子どもは嘘を通して大人との心理的距離を調整したり、嘘によって大人の援助を求めたりしていることがわかる。

臨床事例を分析する際、嘘を暴こうとする側と自己を守るために嘘をつく側という観点からも検討する必要があると考える。なお、最近、渋谷¹⁶⁾は嘘に関する総論を試みている。

引用文献

- 1) 渋谷昌三, 渋谷園枝 (1993) 対人関係における嘘. 山梨医科大学紀要, 10: 57-68.
- 2) Stern, W. (1914) Psychologie der frühen Kindheit bis zum sechsten Lebensjahr. Quelle & Meyer.
- 3) Peterson, C. (1991) What is a lie? : children's use of intentions and consequences in lexical definitions and moral evaluations of lying. In Rotenberg K. J.

(eds.) op. cit.

- 4) 相場均 (1965) うその心理学. 講談社現代新書.
- 5) Ekman, P. (1985) Why kids lie. Scribners.
- 6) Coles, R. Newsweeks, 1989年10月12日の記事より引用.
- 7) Waron, H. 久保田正人 (訳) (1965) 児童における性格の起源. 明治図書より引用.
- 8) 東山紘久 (1992) なぜ、人はうそをつくのか. 発達, 52: 50-57.
- 9) Parke, D. & Sawin, B. (1979) Children's privacy in the home developmental, ecological, and child-rearing determinants. Environment & Behavior, 11: 87-104.
- 10) 東山紘久 (1989) 子どもの「うそ」を読む～逆説うそつきのすすめ. 児童心理, 43: 569-573.
- 11) Newsweeks, 1989年10月12日の記事より引用.
- 12) Piaget, J. 波多野完治ほか (訳) (1969) 新しい児童心理学. 白水社より引用.
- 13) 大平健 (1995) やさしさの精神病理. 岩波新書.
- 14) 西館好子 (1987) 「私、正直です」なんて人は、人間業に不真面目なのよ. コスモポリタン, 7: 78-79.
- 15) 浜田寿美男 (1992) 一筋縄ではくくれないその世界. 発達, 52: 26-33.
- 16) 渋谷昌三 (1996) 人はなぜ嘘をつくのか. 河出書房新社.

Abstract**Emergence and Evolution of Lie****Sonoe SHIBUYA and Shouzou SHIBUYA**

The emergence and evolution of children's lies were studied referring to the report¹⁾ of Shibuya & Shibuya. From when do children begin to tell lies? Why do they tell lies? What is meant by such lies? These problems including the attitudes of juveniles and adults were discussed in this paper.

It is expected that children begin to tell lies from the considerably early stage of development. Children harbor secrets from their parents and tell lies to them. These conducts may be interpreted as representing the feeling of liberation from parental restraints. Children's lies seem closely related to the establishment of ego and socialization.

Parents feel perplexed or angry when betrayed for the first time by their children's lies. However, children may often express their various psychological troubles in the form of lies. Parents should discern the true nature of their children's lies and deal with them as magnanimously as possible.

Department of Psychology